

水稲栽培基本情報（収穫後の管理）

基本技術を励行して消費者に「おいしいお米」を届けよう！

<http://www.pref.chiba.lg.jp/seisan/seiiku/index.html>

千葉県農林水産部
令和2年3月

■ 耕うん、土づくりの実施

おいしいお米づくりには、土づくりが基本となることから、土づくりや耕うんを実施しましょう。

○ 稲刈り後の耕うんの実施

稲刈り後の耕うんは、雑草の発生抑制や土づくりの効果が期待できますので、速やかに耕うんを行います。なお、再生株が大きいほ場では、ロータリーに稲わらが絡み付かないよう、事前に草刈り機等で刈っておきます。

すき込み時期が遅くなると、稲わらが翌年の水稲生育期に分解するため、メタンガスや硫化水素の発生によって、ガス害や酸欠による初期生育の遅れ等が発生するおそれがありますので、早期に耕うんします。



足を踏み入れるとガスが発生

○ 土づくり

稲わらは、燃やすと土づくりの効果がほとんどなくなりますが、すき込むことで、地力を高め、収量の安定化や天候不良での収量減少を抑えます。

また、けい酸資材を 100~200kg/10a 程度施用すると、根の酸化力が増進され、病害虫や土壌還元に伴う各種阻害物質に対して抵抗性を高められます。特に、老朽化水田や砂質土水田ではその施用効果が高くなります。

けい酸はかんがい水や稲わらからも供給されますが、水稲は1作で約 100kg/10a のけい酸を吸収しますので、適切に施用しましょう。

■ 難防除雑草の防除

オモダカ、クログワイ、コウキヤガラ等の主に塊茎から発生する難防除雑草は、発生が長期間にわたるため、移植後の除草剤だけでは防除しきれません。秋冬期の耕うん等の耕種防除と薬剤防除を数年継続し、徐々に確実に塊茎を減らしていきます。

土壌が乾燥するほ場では秋冬期に数回耕うんすることで、塊茎を損傷や寒さで枯らすことも可能ですので、水稲を刈り取ったままにせず、耕深15cm程度を目標に必ず耕うんしましょう。

■ 病害虫防除

○イネばか苗病

ばか苗病菌の胞子は、収穫した稲わら、米ヌカ、もみ殻等に存在し、翌年の水稻種子生産にも大きな影響を及ぼします。

県下全域でのばか苗病対策に御協力をお願いします。

- (1) 種子伝染しますので、種子更新をしましょう。
- (2) 本病の発生ほ場は秋耕し、稲株を土中に埋没して、菌密度を下げましょう。
- (3) 本病の発生ほ場から収穫した稲わら、米ヌカ、もみ殻等は本菌が存在している可能性が高いです。浸種や催芽、は種をする作業場や機具機材をよく清掃して、菌の密度を下げ、感染リスクを下げましょう。

○スクミリンゴガイ（ジャンボタニシ）

九十九里沿岸の地域を中心にスクミリンゴガイの被害が多発しています。

スクミリンゴガイは、用排水路でも越冬し、ほ場への侵入源となることから、用排水路の清掃等、地区全体で防除を実施すると防除効果が高まります。

収穫直後など土が硬い時にロータリーで耕うんを行うと貝の破砕効果が高まります。また、厳寒期は、ほ場を乾かしロータリーで耕うんすることで、越冬中の貝を破壊すると同時に、寒気にさらすことで防除効果が高まります。耕うんは走行速度を遅くし、回転数を早くします。スクミリンゴガイは土中の浅いところで越冬しているため、浅く細かく数回耕すと、貝の破砕効果が高まります。

○イネ縞葉枯病（ヒメトビウンカの対策）

ヒメトビウンカが媒介するイネ縞葉枯病が発病すると、生育不良や出すくみ症状、奇形穂など出穂異常となり、減収します。

本病に感染した収穫後の再生株は、葉に葉脈に沿った不明瞭な黄色い縞状の病斑や奇形穂などの病徴が現れ、ヒメトビウンカが発病株を吸汁すると、ウィルスを保毒しますので、水稻収穫後は早目に水田を耕うんし、稲株を土中に埋没します。また、ヒメトビウンカの越冬場所を減らすため、ほ場周辺の雑草（特にイネ科雑草）も除去しましょう。



再生株の病徴